

国際連語論学会 6 月例会

日時：2017 年 6 月 17 日（土）13：00～14：30

会場：大東文化会館 k-401（東武東上線東武練馬駅北口「イオン側」下車、徒歩 4 分）

ヒト：高橋弥守彦（大東文化大学名誉教授）

テーマ：中日両国の言語と文化

要旨：言葉と現実との関係は「はじめに現実ありき」であり、言葉はヒトを介して現実を反映する。たとえば、中日両言語は以下の例文に見られるように、基本的には対応する。

（1）“如果愿意，请来做客，但请别吃惊。”（『人民』95-12-86）

「よろしかったら、どうぞお訪ね下さい。ただし驚かないように」（同上）

中日両言語は、例（1）のように一般には対応関係になっている。しかし、長年にわたって培われてきた両国の文化の違いにより、原文と訳文とが対応しない場合がある。

（2）过速的心跳，令他脸孔煞白。在门外徘徊了一个世纪，终于伸出发颤的手指，按响了她的门铃。（『人民』95-12-86）

胸が高鳴り、顔は真っ青だった。アパートの下を何度も行きつ戻りつしたあと、ついに震える手でベルを鳴らした。（同上）

（3）五张办公桌都已经有了主，只有最外边那张闲着。（『人民』88-9-99）

五つまでは主があり、入り口のそばのしかあいていない。（同上）

例（2）の下線部は、原文は誇張（デフォルメ）表現であり、訳文は推敲に推敲を重ねた写実（リアリステック）表現であるが、対応していない。例（3）の下線の引いてある原文と訳文は、ものの捉え方を表す視点の違いによる表現であり、やはり対応していない。

本稿では中日両国の文化の違いから来る中日両言語の表現上の違いについて、上掲の 2 点にスポットを当て、先行研究と事例の分析により、その違いと原因を明らかにする。